

一個台灣原住民傳教師在愛努民族的宣教經驗

台灣原住民宣教師のアイヌ民族への宣教経験

The Mission Experience with the Ainu of a Taiwanese
Aboriginal Missionary

Divan Suqluman 日本基督教團北海教區 宣教師

石丸雅邦 翻譯

圖片提供 Divan Suqluman

當我第一次認識並接觸到愛努民族，是在我讀玉山神學院神學研究所二年級的暑假機構實習，那年(2001年)剛好有幸參加台灣基督長老教會(PCT)和日本基督教團(UCCJ)舉辦的「宣教協議會」，地點就在北海道的札幌基督徒中心。在那次的議會中，也特別針對愛努民族宣教議題做討論，雙方(PCT和UCCJ)達成協議，北海教區可聘任台灣原住民族的牧者，共同為愛努民族宣教事工來合作。於是在2005年8月31日我來到日本，9月1日開始在北海道的宣教事工。

很多人會問我：愛努民族教區基督徒



私がアイヌ民族をはじめて知り接触したのは、私が玉山神学校大学院神学研究科(玉山神学院神學研究所)

二年の夏休みの機関実習中であつた。その年(2001年)、ちょうど幸運にも台湾基督長老教会(PCT)と日本キリスト教団(UCCJ)の催した「宣教協議会」に参加できた。会場は北海道札幌にある北海道クリスチャンセンターであつた。その会議の中で、特にアイヌ民族の宣教の議題について討論がなされ、双方(PCTとUCCJ)の間に、北海教区に台湾原住民族の牧者を任命し、共同でアイヌ民族の宣

教事業に協力するという合意に達した。2005年8月31日に私は日本に来て、9月1日に北海道での宣教事業を始めた。

多くの人が私に次のような質問をする。「アイヌ民

徒有多少人？教會有幾間？很抱歉我必須誠實地說：沒有愛努民族教區，沒有愛努民族教會；愛努民族基督徒人數多少，我也不知道。也許你們會驚訝怎麼會這樣，請先放下我們慣有的想法，不是所有的原住民族都已接受基督信仰。我們常會用台灣原住民族教會的立場，去看其他國家的原住民族，如同我們看待日本的先住民族——愛努民族一樣（日本稱愛努民族為先住民族）。

早期英國聖公會宣教師 John Batchelor (1854~1944) 曾致力於愛努民族宣教事工，努力翻譯愛努語之新約聖經，編纂愛努語字典等；也培育出一位名傳道人——江賀寅三。John Batchelor 宣教師當時在愛努民族傳道時，有 1158 名愛努民族受洗成為基督徒，以當時聖公會在北海道的信徒的總人口數 2380 人中，半數就是愛努民族。從這樣的信徒人數比率看來，宣教似乎很成功。但是後來遇到日俄戰爭，物價高漲及教會自給自足日增困難，又加上 John Batchelor 宣教師將傳道事工轉交給日本信徒後，愛努民族信徒急速減少。其中最主要的原因有一點是在於「據說，當時的日本信徒對愛努民族沒有強烈的關心。」日人信徒對待愛努民族的態度

族教區的クリスチャンは何人いますか？教会はいくつありますか？」と。たいへん申し訳ないことではあるが、私は正直にこう述べるほかない。「アイヌ民族教区はありません。アイヌ民族教会はありません。アイヌ民族のクリスチャンが何人であるか、私も分かりません。」と。どうしてこんなことがありうるのか、と驚かれるかも知れない。しかしまず私達の固定観念を脇において欲しい。つまりすべての原住民族がすべてキリスト教の信仰を受け入れたわけではない。私達は台湾原住民族の教会の立場から、他の国の原住民族を見がちであり、それはまた日本の先住民族アイヌ民族を評価する際もまた同様である（日本ではアイヌ民族を先住民と呼んでいる）。

最も早い時期にアイヌ民族宣教事業に力を尽くしたのはイギリス聖公会の宣教師ジョン・バチェラー (1854-1944) である。アイヌ語の新約聖書訳やアイヌ語字典などに努力を注ぎ、また有名な伝道者——江賀寅三をも育成した。ジョン・バチェラー宣教師はその当時、アイヌ民族に布教した際、1158名のアイヌ民族が洗礼を受けてクリスチャンとなった。当時、聖公会の北海道での信者の総人口数は2380人で、アイヌ民族は実にその半数を占めていたのである。このような信者人数の比率から見て、宣教は非常に成功したといえよう。しかしその後、日露戦争が勃発し、物価が高まって教会の自給自足は日増しに困難となっていった。またジョン・バチェラー宣教師が伝道事業を日本の信者に譲った後、アイヌ民族の信者は急速に減少していった。その最も主な原因の一つは「聞くところによると、その当時の日本人信者はアイヌ民族に対して強い思いやりが欠けていたそうです」。日本人の信者はアイヌ民族に対して「軽視、同情」の態

有「輕視、可憐」之意，這是愛努民族無法法忍耐的事，也是愛努民族對於日本信徒內心持有強烈的排斥感。(梅木孝昭編著，《アイヌ伝道者の生涯》，北海道出版企画センター，昭和六十一年十月六日發行，p94-95。)

因為日本人政府的侵略，讓愛努民族失去他們的土地；因為日本人政府的同化政策，讓愛努民族失去他們的語言，甚至讓他們也失去了身分認同感。而且教會到後來也因為沒有妥善處理福音與文化的衝突，以及用同理心去關心他們，因而造成信徒紛紛離開教會。到現在，愛努民族有些人對基督教還是持有強烈的排斥感與距離感。例如，每次參加一些愛努民族的活動時，我都會介紹自己是從台灣來的原住民族布農族的Divan・Suqluman，這時會場一定會響起熱烈的掌聲及親切的歡迎聲；但是當我接著說我是台灣基督長老教會的牧師，現在是日本基督教團北海教區的宣教師時，馬上強烈感受到會場一片鴉雀無聲，距離感也開始發酵。

也許你/妳們會覺得我很誇張，但卻是一個事實。民族意識比較強烈的人，就會很直接問我：怎麼會想要來北海道宣教？他其

度を取っており、このことがアイヌ民族にとって耐え難いことであった。アイヌ民族が内心、日本人信者に対して激しい排斥感を持つ原因でもある(梅木孝昭編著、『アイヌ伝道者の生涯』、北海道出版企画センター、昭和六十一年十月六日発行、p94-95)。

日本人政府の侵略のため、アイヌ民族は彼らの土地を失うこととなった。また日本人政府の同化政策によって、アイヌ民族は彼らの言語を失うこととなり、甚だしきに至っては彼らの民族的アイデンティティーをも失わせてしまった。その上教会でさえも福音と文化の衝突の問題を適切に処理しておらず、同情心から彼らに関心を持ち、そのことが信者をして次から次へと教会から離れさせたのであった。現在に至るまで、一部のアイヌ民族はクリスチャンに対して強烈な排斥感と距離感を持っている。例えば、毎回アイヌ民族の活動に参加する時、私が毎回、自分は台湾から来た原住民族ブヌン族Divan・Suqlumanであると紹介すると、会場は決まって熱烈的拍手と親切的歓迎の声が鳴り響く。しかし引き続き、自分が台湾キリスト長老教会の牧師で、今は日本のキリスト教団の北海教区の宣教師だと言った途端に、会場は水を打ったように一面しんと静まりかえってしまい、距離感もまた同時に発酵し始めてしまう。そんなおかげさな、と思うかも知れないが、しかしこれは一つの事実である。民族意識が比較的強烈な人は、単刀直入に私にこう聞くであろう。「なぜ北海道に宣教に来たいと思ったのですか？」と。実際その本音とは「キリスト教はまたもや私達アイヌ民族を変えてしまうためにきたのではありませんか。」と言っているのである。これも私が北海道で見た一つの現象である(そして個人的な感想でもある)。積極的にアイヌ民族の権利を勝ち取ることに努力し、勇



John Batchelor 是愛努地區的第一位基督教宣教師。

實是在問我：基督教是不是又想要來改變我們愛努民族呀。這也是我在北海道看見的一個現象（也是個人想法）：積極爭取愛努民族權利、勇於承認自己是愛努民族的人士，往往卻對基督教有強烈的排斥感與距離感（這也是北海教區牧者們曾遇到的問題）。

愛努民族目前總人數約2萬3千人，至今他們仍受到差別待遇與歧視的問題。北海教區也為了努力要跟愛努民族重新建立友好關係，在宣教事工上設了「愛努民族委員會及愛努民族資訊中心」，並在多位牧者及會友的努力下，有了一點點的果效。愛努民族委員會及愛努民族資訊中心，持共同的目標：與愛努民族建立連帶關係（攜手合作建立夥伴關係）、和平關係（共擔共享），並積極參與支援有關愛努民族的各種訴訟行動（如人權、土地、資源等）。

有些愛努民族的孩子們，身在單親家庭，生活貧困，無法到學校上課。北海教區看見了這樣的問題，於是愛努民族委員會於1988年推動「愛努民族獎學金－基督教協力會」。至今幫助了73名愛努民族學生上高中、專門學校、大學等就讀。也幫助二個愛努民族學生學習教室：1.帶廣生活館「エテケカンパ(Eteke Kanpa)」(愛努族語意：手牽著手。也是一同攜手合作、努力的組織的方針。以用愛努語疊合手這樣的意義，一同互相拉手打算努力的會)；2.浦河

敢に自分がアイヌ民族の人間であることを認めている人々は、キリスト教に対して強烈な排斥感と距離感を持っているものである（これも北海教区の牧者がかつて出会った問題である）。

アイヌ民族の現在の総人口は約2万3千人である。今なお彼らは依然として差別や偏見の問題に直面している。北海教区もアイヌ民族と再び友好関係を創立するために努力しており、宣教事業のために「アイヌ民族委員会」及び「アイヌ民族情報センター」を設立し、多くの牧者の努力のもと、わずかながらも効果があった。「アイヌ民族委員会」及び「アイヌ民族情報センター」は共通の目標を持っている。アイヌ民族と連帯関係（共に手を携えて協力するパートナーシップ）、平和な関係（共に負担し享受する）をつくりあげ、そしてアイヌ民族の様々な訴訟活動（例えば人權、土地、資源など）に対して積極的に参加・支援を行う。

アイヌ民族の子ども達の一部は、一人親家庭であり、生活が貧しく、学校で授業を受けることができない。北海教区はこのような問題を直視し、アイヌ民族委員会により1988年に「アイヌ民族奨学金・キリスト教協力会」が推進されている。今まで73名のアイヌ民族の学生が高校、専門学校、大学などで勉強するための援助を受けた。また2つのアイヌ民族学生の学習教室を援助している。1つは帯広生活館「エテケカンパ」（アイヌ語－手と手を取りあうという意味。またいっしょに協力、努力する組織の方針をも指す。このようなアイヌ語での手を重ねて合わせるという意味から、いっしょにお互いに握手して努力する会という意味がある）、2つ目は浦河教会の「ノ

教會「ノンノ(nonno)学校」(「ノンノ」愛努族語意：花)。

我擔任愛努民族委員會的委員之一，同時也參與帶廣生活館「エテケカンパ」的活動。エテケカンパ的輔導同工，大都是帶廣教會的會員，於每週四晚上學習。學生不僅是接受課業輔導，也學習母語、歌曲、舞蹈等愛努民族文化。輔導的同工們努力啟發學生們愛讀書的心，建立自信心，及對自身為愛努民族有認同感。雖然參與的學生人數不定，有時20幾個，有時也有只來2、3個，但輔導的同工們不放棄，即使只來一個學生，他們也都還是很認真教導。

另一間由教會開放空間為愛努民族學生辦的「ノンノ学校」。目前因教會牧師離任之後無人帶領，停滯中。(我最初的意願是想來浦河服事，但北海教區有他們的考量，我順服他們的安排。)

來日本兩年了，參加了各樣愛努民族的活動，很少見到年輕人參加。愛努民族的前輩們，很努力在歷史、文化、權利上做回復保存的工作，但是愛努民族的年輕人，卻對前輩們所做的努力有點不關心，有點令人嘆息。

來到北海道之後，才開始真正接

ンノ学校」である(「ノンノ」=アイヌ語で花の意)。

私はアイヌ民族委員會の委員の一人を担当し、また同時に帯広生活館「エテケカンパ」の活動にも参加した。「エテケカンパ」で補習の奉仕をするのは、その大部分が帯広教会の教会員で、毎週木曜日の晩に授業を行っている。学生は授業の補習を受けるだけではなく、民族語、歌曲、舞踊などアイヌ民族文化をも学んでいる。補習の奉仕者は学生達に勤勉さを啓発し、自信及びそれぞれがアイヌ民族であることに対するアイデンティティーを持たせることに努力している。参加する学生の数は一固定せず、二十数人の時もあれば、たった2、3人しかいない時さえある。しかし補習の奉仕者達はあきらめず、たとえわずか1人の学生しかこなくても、彼らはいつもまじめに教えている。

もう1つのケースは、アイヌ民族学生のために教会を開放して運営される「ノンノ学校」として開放するものである。現在牧師が離任して牧者がいないため、活動休止中である(私の最初の希望は浦河に来て、この奉仕をすることであったが、しかし北海教区には彼ら自身の考慮するところがあり、私は彼らの意向に従った)。

日本に来て二年が経ち、様々なアイヌ民族の活動に参加したが、若者の参加を見かけることが非常に少なかった。アイヌ民族の年長者達は、歴史、文化、権利の回復・保存の仕事に努力を注いでいるのだから、しかしアイヌ民族の若者は、年長者達の努力に対して無関心であり、嘆かわしいことである。

北海道に来た後、ようやく本当にアイヌ民族に接触

觸愛努民族，他們擁有非常美的傳統、文化，然而隨著日本社會的變遷，加上政策的同化，也讓他們漸漸失去原有的美好傳統、文化。我不是說，我對愛努民族有了非常深的認識和了解，我才剛在起步的當中。也許你/妳們會問我，在北海道做宣教師，最主要的工作是什麼？我只能說盡我的心力做好「橋樑」的。這個「橋樑」要做連結的工作，將愛努民族跟日本教會連結，將愛努民族跟台灣原住民族教會連結，當然，更重要是能連結在基督裡。我一個人的能力是有限，但是透過大家的互助，期盼這座橋樑能更穩固、更紮根。

するようになった。彼らは非常に美しい伝統、文化を持っている。しかし日本の社会の変遷により、また同化政策のため、彼らに元からあるすばらしい伝統、文化がだんだん失われてきている。私はけっしてアイヌ民族に対して深い造詣と理解があるわけではなく、ちょうどスタートを切ったに過ぎない。私は次のような質問を受けるかも知れない。「北海道で宣教師をする上で、最も主な仕事は何ですか？」と。私はただこう言うしかない。私の力を尽くして「橋げた」の役割を果たしていると。この「橋げた」とは結びつける仕事を果たすことであり、すなわちアイヌ民族と日本の教会を結びつけ、さらにはアイヌ民族と台湾原住民族の教会をつなぐ仕事である。もちろん、更に重要なのはクリスチャンとして結ばれることである。私一人の力は限りがあるが、しかし誰もがお互いに助け合うことで、この橋げたを更に安定させることができ、更に根を下ろすことが期待できるのである。

▼ 每年九月的第三個禮拜一，在札幌市舉辦的「鮭魚祭」。

